与板楽山亭にて　楠本憲吉（俳人）

大坂屋三輪家と良寛を結ぶ美しく強い絆

「三輪左一」「維馨尼」

良寛が左一老を偲ぶ碑

良寛は、父以南の実家（割元庄屋新木家）が与板にあったことから、縁者の多いこの地を幼少の頃から足しげく訪れています。大坂屋にも頻繁に足を向け、特に、六代目三輪長高の末弟「左一」とは、詩歌・学問・仏教を通じ、お互いに敬慕の念で結ばれた唯一無二の「親友」でした。良寛よりも年下の左一は先に亡くなってしまいましたが、左一との思い出にひたる良寛の心には、いつもこの原風景が映っていたことでしょう。

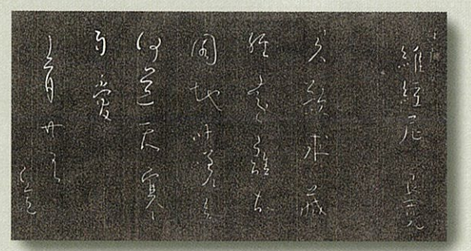
▶良寛が左一を偲ぶ碑

天寒自愛の碑

六代目長高には、「おきし」という美しく教養の高い娘がおりました。一度縁があって嫁ぎましたが、夫と死別して三輪家に戻り、出家して「維馨尼」と名乗りました。

経典の購入資金を調達するため、江戸へ単身托鉢に出るという維馨尼の決意にうたれ、寒空のもと長い旅路を案じ、良寛は深い心情のこもった書簡を寄せています。

▶良寛像



▲天寒自愛の碑

良寛が維馨尼に宛てた書簡の碑。当時の女性への書簡としては異例の「漢詩」でつづられており、維馨尼に対する良寛の特別な敬愛の情がうかがえます。

◀天寒自愛の碑（現代語訳）

江戸にて
維経（馨）尼　良寛

君欲求蔵
経遠離故
園地吁嗟吾
何道天寒
自愛

十二月二十五日　良寛

江戸にて
維馨尼　良寛

君蔵経を求めんと欲し
遠く故園の地を離る
吁嗟吾何をか道わん
天寒し自愛せよ

十二月二十五日　良寛

大坂屋三輪家の系図

（初代）――（五代）三輪多仲長旧
- 左一（左市）
- （六代）多仲長高
  - おきし…多仲長高の娘、左一の姪　維馨尼
  - （七代）飛兵衛長泰
    - （中略）
      - （十一代）潤太郎長主
        - （十二代）一郎
          - （十三代）博久
          - （十四代）洋二郎
        - 大次郎長雄（弟）（号・三輪越龍画伯）
          - 信郎（号・三輪晁勢画伯）
            - 晃久（日本画家）

道順のご案内

▼楽山苑前の駐車スペースはわずかですので、支所前の駐車場をご利用下さい。

楽山苑の主な催し

- ライトアップ／5月中旬

お問い合せ先

長岡市与板支所産業建設課
〒940-2492 新潟県長岡市与板町与板甲134
TEL(0258)72-3201　FAX(0258)72-3341
Eメールアドレス　yit-sangyo@city.nagaoka.lg.jp
ホームページアドレス　http://www.city.nagaoka.niigata.jp

与板観光協会
TEL・FAX(0258)72-4161
ホームページアドレス　http://www.yoita.info/

(H28.2)

楽山亭

清澄にして細やかな主の心尽くし

与板「大坂屋」三輪家は、江戸中期屈指の豪商として広くその名を全国に知られていました。明治に入り、十一代当主となった三輪潤太郎は、屋敷裏手の小高い傾斜地と樹木の姿に風雅を見いだし、明治二十五年(一八九二)ここに茶室風の別荘「楽山亭」を造りました。完成後まもなく国会議員となった潤太郎の招きに応じ、時代を担った政界の名士たちが数多くここを訪れています。

簡素な中にもきめ細やかな仕掛けと匠の技が凝らされ、客人をもてなすさまざまな趣向にあふれた「楽山亭」は、今も町の人たちから「べっそう」と親しみを込めて呼ばれています。

十一面観音像

三輪潤太郎が「楽山亭」の完成と共にこの地にお迎えした観音像で、高さ1.6mの美しい木像は室町時代の作といわれています。

「大坂屋」の護り仏として篤く信仰されましたが、その後幾多の変遷を経て、今はこの地で静かに人々の暮らしを見守っています。

(積翠菴)

積翠菴と松村宗悦

幕末に活躍した越後柏崎の茶人「松村宗悦」は、天保年間、柏崎地内に京都表千家に伝わる有名な茶室「不審庵」を模した草庵風の茶室を造りました。

明治三十年(一八九七)、三輪潤太郎がそれをこの地に移築して、作者松村宗悦の号をとって「積翠菴」と名づけたのです。

現在の建物は平成九年に資料を元に復元したもので、当時の茶室は形を変え「北方博物館」(旧横越町)に再移築されています。

1 八畳座敷

眺めのよい東側に向かって、玄関の外壁より1間ほど張り出して造られたこの客間は、幅広の廻り縁をめぐらし、ゆったりとした開放的な空間を演出しています。特に、縁側の目ざわりな柱を省略したところは、屋内に居ながらにして大自然との融合をはかる、主の思いきった趣向です。

2 舟板廊下

長さ2間半の板張り廊下は味わいに富み、その昔大坂屋が「廻船問屋」として活用した舟の側板を使っています。

3 茶室1

3畳よりもちょっと余裕のある3.3畳の「居心地のいい」小空間で、利休の好んだ「竹吊り窓」を取り入れています。その窓からは、風流な「織部灯篭」が眺められます。

4 織部灯篭

桃山時代の有名な茶人「古田織部」好みの石灯篭で、桂離宮にも見られます。下の突起部分が十字架のようにも見えることから、「キリシタン灯篭」ともいわれております。

5 茶室2

「水屋」を隔てて並ぶ六畳茶室は、中央に仏壇をもつ「持仏堂茶室」になっており、最も変化と工夫の凝らされた空間です。皮付きの赤松や竹、萩などを巧みに組み合わせた「掛け込み天井」などはその代表的なものです。

露地口門

樹木や灯篭を楽しみながら茶室へと向かう、庭園への入り口門です。門の「楽山亭」は、「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」(孔子「論語」)から付けられた名称であると言われ、看板は「舟板」で作られています。

「六方組み」石垣

何気なく見える石垣ですが、1個の石に注目すると、その石は必ず6個の石に囲まれている、堅固な「六方組み」技法で築かれています。耐震性にもすぐれ、昭和39年(1964)の新潟地震(マグニチュード7.5)の時でさえ、この石垣が崩れることはありませんでした。